

# 徳川家の女性と総本山知恩院

今堀太逸

## 〔抄録〕

日本人と寺院の歴史を研究するとき、宗派の歴史をふまえて考察する必要がある。慶長八年（一六〇三）、徳川家康は法然廟堂の浄土宗総本山知恩院に大伽藍を造立した。以後、御影堂には徳泰院（家康母於大）と家康・秀忠の將軍束帯像が安置され、所司代以下の武家衆が月参りをすることになる。

家康が知恩院を將軍家京都菩提所としたのは、先祖松平親忠の五男超誉存牛が二十五世住職として、天皇家の帰依を受け、勅願所・浄土宗総本寺の地位を確立したことによる。

徳川三代將軍は、勅願所である知恩院を將軍家菩提所として崇

敬、支援することで、天皇家と將軍家の融和を果たした。その結果、元禄十年（一六九七）一月十八日、東山天皇より法然に「円光大師」の大師号が下賜され、知恩院が京の町で平和と繁栄を象徴する伽藍として隆盛する。

本稿では、徳川家の菩提所としての知恩院、また、徳川家ゆかりの女性の浄土宗帰依と知恩院崇敬を考察する。

**キーワード** 日本人と寺院、將軍家京都菩提所、葬祭と年忌仏事、

信心と供養、勢至堂万日回向

## はじめに

京都東山の浄土宗総本山知恩院の御影堂の東、長い石段の上には法然廟、勢至堂がある。慶長以前の知恩院境内である。法然の本地仏は勢至菩薩であるが、慶長十五年（一六一〇）に御影堂が完成したとき、

法然の御影を遷し、その代わりに勢至菩薩を安置したので勢至堂の名がついた。法然の廟堂知恩院とは勢至堂周辺のことであり、中世の知恩院は小さな規模であった。

近世の知恩院には、末寺を統括する総本山、天皇と国家の安穩を祈る勅願所、加えて將軍家の菩提所という三つの顔がある。現在の大伽

藍、禅宗様の三門や経蔵は、徳川家が將軍家の威信を示すために寄進したものである。知恩院は徳川家ゆかりの人たちの崇敬と支援により、京の町の平和と繁栄を象徴する大伽藍となったのである<sup>①</sup>。

將軍家京都菩提所である知恩院には、所司代と東西の両町奉行、近隣の大名家、京都滞在の武家衆が正月やお盆、家康（十七日）、秀忠（二十四日）の月命日には仏参をしている。御影堂の家康・秀忠の二代將軍像、集會堂仏間の三代將軍家光像（伝・狩野探幽筆）・四代將軍家綱像（伝・狩野永真筆）の両画像、大方丈仏間に安置する歴代將軍の位牌に手を合わせ、権現堂に参詣していた<sup>②</sup>。

今年、平成二十八年は徳川家康が亡くなって四百年、孫娘千姫が没して三百五十年に当たる。二人とゆかりの深い浄土宗寺院においては、遠忌法要・記念事業が行われている。平成二十七年四月、総本山知恩院においても家康の四〇〇回忌遠忌法要が厳修された。

本稿では、第一「家康の母於大と伽藍造営」、第二「結城秀康・良正院（督姫）と知恩院」、第三「松平定勝・定綱と念仏寺一切経」、第四「千姫供養と知恩院・伊勢寂照寺」、第五「一条大政所（千姫孫輝姫）と勢至堂万日回向」、第六「円光大師号と勢至堂墓地・浄琳院廟所」の六章より、將軍家菩提所と徳川家ゆかりの女性の崇敬と支援を考察したい。

## 第一 家康の母於大と伽藍造営

慶長三年（一五九八）八月十八日、豊臣秀吉が六十二歳で没すと、

翌年一月秀頼は大坂城に移り、家康が伏見城に入った。四月に秀吉の墓所阿弥陀ヶ峰の麓に吉田兼見が神主となり豊国廟が建てられると、後陽成天皇は豊国大明神の神号と正一位の神階を贈った。

家康は慶長五年（一六〇〇）豊臣政権の主導権をめぐる関ヶ原の合戦に勝利、武家政権の代表者としての地位を獲得、同七年五月一日参内・院参し後陽成天皇と正親町上皇に拝謁、翌二日女院（新上東門院）御所で催された猿楽を天皇とともに鑑賞している。同八年二月に征夷大將軍の宣下を受けて江戸に幕府を開いた（六十二歳）。

家康は、慶長十年（一六〇五）四月、將軍職を子の秀忠に譲り、同十二年駿府城に隠退した後も大御所として実権を掌握した。この間の家康生母（於大の方）の上京と葬儀、知恩院の伽藍造営を紹介する。

### ① 於大の上京

天文十年（一五四一）岡崎城主松平広忠に嫁いだ刈谷の城主水野忠政の娘於大は、翌年家康を産んだ。その二年後、兄が織田方についたため離縁され、久松俊勝と再婚、康元、勝俊、定勝の男子をもうけた。家康と信長の同盟後は、於大は徳川家と行き来し、家康も義弟たちを優遇し、慶長七年（一六〇二）春には七十五歳の老母を上京させ伏見城で世話をした<sup>③</sup>。

上京した於大は、秀吉没後落飾して京都三本木に隠棲していた秀吉の正妻、北政所おねの邸を同年五月十八日に訪問している。おねは豊国社に月参りをしていたが、この訪問により社参を取りやめたことが兼見の弟で豊国社の社僧梵舜が日記に「政所、御用により社参なし」

（『舜旧記』）と記している。於大は五月二十二日に参内、後陽成天皇に拝謁、その翌日豊国社に参詣して九十貫文を奉納している。

七月になり於大が病に臥せると、朝廷は病氣平癒の祈禱を命じる論旨を石清水八幡宮以下の諸社寺に下した。醍醐寺三宝院の義演も、七日間の祈禱をし「内府母儀の祈禱結願、巻数を伝奏へ遣わす」と祈禱の報告を日記『義演准后日記』に記している。

七月廿六日

繪旨到来了。

就内府御母儀所勞、一七ケ日、別而可被抽懇祈之丹誠旨、可令申入三宝院准后給、仍執啓如件、

七月廿三日

左少弁総光へ広橋也

謹上 大納言法印御房

右、今日到来、遅引不可説。則写之、寺務代理性院（公秀）へ遣之。則時山上・山下、彼奉書ヲ以テ相触了。

八月四日、晴

内府母儀祈禱結願、巻数、伝奏へ遣之。

於大が慶長七年八月二十八日（命日は二十九日）、伏見城で亡くなると、中陰の法事は、知恩院において二十九世満誉尊照導師のもとに営まれた。遺骸は江戸に送られ、小石川の寿経寺（のち法名の伝通院に改称）に葬られた。

『義演准后日記』九月六日

内相府母儀中陰、東山知恩院ニテ在之云々。仍関東へ御経不送之、祝着々。母儀ハ伏見城ニテ御他界也。雖然、其御身ハ江戸へ御

下也。於彼所御葬送在之歟。如何。

梵舜は『舜旧記』に、禁裏より触穢の通知がだされ、豊国社においても、注連縄が引かれて神事が停止され、九月十七日から二十七日迄の間、祭神秀吉に神供は供えられず、おねも参詣を取りやめたことを記載している。

九月十六日

内府母義、大方触穢之事。自禁裏依被仰出、豊国社同巫女屋迄、触穢注連可引之由、二位卿（吉田兼見）申付、社ニ注連引也。次神官共ノ門ニモ注連引也。

十七日

今日ヨリ豊国社へモ神供、当月廿七日迄不備也。

十八日

依触穢、政所不参也。

なお、おねは高台院の号が許されると、家康の助力を得て建立した高台寺に移り、後家尼としての生涯を送った。

## ② 菩提所知恩院と徳泰院殿

知恩院において執り行われた葬儀の於大の法号は「徳泰院殿蓉誉光岳智香大禅定尼」である。但し、現在安置の位牌の法号は「徳泰院殿光岳永照智香大禅定尼神儀」となっている。

宝暦八年（一七五八）年の知恩院『年中行事録』八月二十九日に、

一、徳泰院殿御向月、尊前御出勤、大衆集会、四奉請・弥陀経  
へ十方恒沙仏文・念仏一会、御下堂、御靈膳三汁九菜供え候

# 事。

とあり、年忌を勤めている。<sup>(4)</sup>百回忌は元禄十四年（一七〇一）、百五十回忌は宝暦元年（一七五一）に勤められていて、逮夜・御斎法事の次第が『日鑑』に記載されている。<sup>(5)</sup>

ところで、家康は伏見城において、文禄年末に満誉尊照との間で、知恩院を徳川家の菩提所とする契約を結んだが、天保三年（一八三二）の「御菩提所知恩院御由緒」には、家康が母の菩提のため大伽藍造立を決意したことを伝えている。

一、神君様伏見お城に於いて、廿九世満誉大僧正え御師檀の御契約遊ばされ、御治世の最初、知恩院を御菩提所に定め置かれ候。これに依つて、慶長七年御母公徳泰院様へ伝通院様御事へ御菩提のため、速やかに大伽藍を御建立、本堂西の壇上に尊影・尊牌をご安置。

また、それに加えて、「西国鎮護のため神君様御束帯の神影、同壇上に御安置仰せ出され候」、家康自身の木像の安置も命じたと記している。<sup>(6)</sup>

翌慶長八年（一六〇三）正月、家康は伏見城において諸大名・親王・公家衆・諸門跡等の年賀を受け、二月に征夷大將軍となると、五月には孫女千姫（七歳）が母小督（崇源院）に伴われて江戸より伏見に到着した。千姫は七月二十八日、大坂城の秀頼（十一歳）に嫁いだ。家康は、母の一周忌の同年八月二十九日、知恩院に参詣し造営工事を見学、十月には寺領七百三十石を寄進した。また、月命日に参詣すると、一山大衆に菓子や金子を贈っていて、慶長十年（一六〇五）七月

二十九日の参詣の際には黄金二百枚を持参している（『鹿苑日録』）。

## ③「徳泰院」と「伝通院」

ところで「伝通院」は、上述したように、知恩院での葬儀の後、慶長七年九月、遺骸が江戸に送られ同十八日、増上寺源誉存応を導師として大塚で火葬され、小石川の寿経寺に葬られた際に授与された法号「伝通院殿蓉誉光岳智香大禅定尼」である。

知恩院では「徳泰院」様として年忌を勤めていたが、明和二年（一七六五）八月、十代將軍家治の台命により、鎌倉光明寺より五十五世住職として晋山した興誉正含は、翌三年一月七日、「伝通院様」と申すようにとの尊意を知恩院役所に伝えた。同日『日鑑』に、

一、徳泰院様御法号の事、伝通院様と申し候て然るべき旨、仰せ聞かされ候。役所より申し上げ候は、最初当山え入りなされ候と申す儀、永世失脚なきたため二、徳泰院様と申し来たり候。然りながら、尊意（興誉正含）、ご尤もに存じ奉り候（以下、傍点筆者）。

とみえる。知恩院役所においては、以後、於大の像を「伝通院様」と呼ぶようにしたようである。この年八月二十九日の『日鑑』に、

一、伝通院御忌日。尊影前勤行、尊前（興誉正含）御参堂、大衆中出仕。尤も今日御祥月二付き、御戸これを開く。

と記載している。知恩院においても徳泰院像を伝通院像として、供養するようになった。

#### ④ 寺域拡張と大工指置状

寺地の造成から開始された知恩院造営事業は、これまでの知恩院の山容をまったく一新する大工事であった。

幕府の命により、寺域拡大のため青蓮院領の土地がさかれ、親鸞聖人の廟所を鳥辺山の延年寺山（東山五条）に移し、臨済宗五山派の名刹常在光院を相国寺内に、聖徳太子を本尊とし鎌倉時代に律宗の叡尊が庶民に菩薩戒を授けた白毫寺（通称太子堂）は下寺町に移転した。

工事は九鬼守隆・分部光信らの大名が分担し、大工頭には幕府の重要な土木・建築工事に敏腕をふるった中井正清（通称藤右衛門）がなつた。二十名の大工衆派遣を記す慶長九年（一六〇四）閏八月六日付「大工指置状」が伝来する。

公家や僧侶の日記には、造営見学を訪れ驚嘆した記事が散見する。

義演は慶長八年（一六〇三）三月十七日に見物して、すでに工事が進められていたことが伺われる。

・義演の日記『義演准后日記』。

慶長八年（一六〇三）三月十七日、永観堂・慈照院等見物。帰路

ニ知恩院作事見物。將軍（家康）ヨリ御沙汰也。

慶長九年（一六〇四）八月十五日、寅剋、法住寺ヨリ祇園参詣。

夜中之間神前ニ徘徊。天明ノ後、知恩院本堂作事見物。日出時

分、法住寺へ帰、齋受用了。

・船橋秀賢の日記『慶長日件録』。

慶長九年（一六〇四）五月十七日、祇園・清水寺へ参詣。次靈山

正法寺へ行。次智恩院新造之堂宇見物ニ行。漸渡桁者也、「同

年九月十七日」四条（隆昌）・冷泉（為満）令同心清水寺参詣。帰路知恩院本堂造作令見物。

慶長十五年（一六一〇）閏二月二十二日、冷泉中将（為満）・山科内藏頭令同心、南禅寺金地院へ行。杉原十帖遣之。次正因庵（英岳景洪）へ行。足袋一足遣之。於悟心院有晚餐。帰路知恩院新造見物。

慶長十五年（一六一〇）五月、伽藍が落成すると、前年に朝廷より僧正法印に任ぜられた満普尊照は、駿府の大御所家康、江戸の將軍秀忠に御礼のため東海道を下つた。幕府より道中に伝馬三十疋、人足三十人が付けられ、將軍家菩提所となつた知恩院住持にふさわしい道中となつた。

#### 第二 結城秀康・良正院（督姫）と知恩院

徳川家康の最初の妻は、弘治三年（一五五七）、十六歳で結婚した築山殿である。長男信康と長女亀姫が生まれた。母と息子は、織田信長に甲州武田氏への内通の嫌疑をかけられ、天正七年（一五七九）殺害された。亀姫は家康の家臣奥平信昌に嫁ぎ、四男一女をもうけた。

二番目の妻は、家康を臣従させたい羽柴（豊臣）秀吉により、夫の佐治日向守（一説に副田甚兵衛）と離縁させられ、天正十四年（一五八六）五月、四十四歳で家康に嫁いだ秀吉の異父妹朝日姫である。朝日姫は同十六年、母の病氣見舞いに上洛すると聚楽第にそのまま留まり、同十八年正月十四日亡くなった。秀吉は妹の死を秘し、東福寺に



埋葬した（四十八歳、諡号「南明院」）。家康は霊殿・客殿・方丈等を建立した<sup>⑧</sup>。家康はこれ以後、正室を置くことがなくなり、約十五人の側室との間に十一男五女をもうけた。

家康の二男は結城秀康、二女は督姫であるが、その葬儀導師は知恩院の満誉尊照が勤めた。知恩院との縁を紹介する。

## ① 次男秀康と浄土宗

天正二年（一五七四）二月八日、家康とお万の方（氷見氏、長勝院）との間に生まれた秀康、幼名於義丸は小牧・長久手の合戦の講和に際し、大坂に赴き、秀吉の養子となった。元服すると、従五位下・三河守となり、秀吉の秀と家康の康の偏諱ををうけ、羽柴三河守秀康と名乗り、河内国に二万石の所領を与えられた。

秀康は、豊臣一族の大名として頭角をあらわしたが、天正十八年（一五九〇）八月、結城晴朝の養子となり、下総国結城十万一千石を相続、結城三河守と称した。文禄の役には、秀吉に従い備前国（佐賀県）名護屋に駐屯した。

秀康は、秀吉が没すと父家康に従い、慶長五年（一六〇〇）、関ヶ原の合戦の論功行賞により越前国六十八万石を賜り、翌年北庄（福井の旧称）に入部、城下町を整備した。秀康は慶長十一年（一六〇六）五男の五郎八（直基）に結城の姓を継承させ、その後は、禁裏の増築・仙洞御所造営の総奉行、伏見城の留守居として父家康を助けたが、翌十二年三月、病により越前に帰国した。

秀康の病の治療のため、京都から当時評判の名医三名が下向し

（『当代記』）、朝廷では内侍所で臨時御神楽が奏され病平癒が祈られたが（『御湯殿上日記』）、慶長十二年閏四月八日、北庄城で死去、三十四歳であった。

結城家の菩提寺の曹洞宗孝顕寺（福井市）に葬られ、法号「孝顕寺殿吹毛月珊」として弔られたが、このことを聞いた父家康の「浄土宗たるべき」との意見により、浄土宗に改葬され、浄光院（運正寺）が建立され、「浄光院殿森嚴道慰運正」と号した<sup>⑨</sup>。

この葬儀導師として福井に招請されたのが知恩院の満誉尊照であり、浄光院の開基となった。知恩院の「御菩提所知恩院御由緒」には、家康の上意（命令）を、

神君様聞召なされ、我家は浄土宗也。結城を名乗り候ハ、然るべく候へ共、既ニ復姓松平の上は、今般禅宗ニ改められるべき事は如何と、上意これ有り候也。

と記録している<sup>⑩</sup>。

## ② 督姫の生涯

最初の側室といわれているのが西郡局である。永禄五年（一五六二）、家康が三河国西郡の城を攻略、城主の鵜殿長忠が松平家に仕えるようになると、娘（西郡局）も岡崎城の奥勤めに出て、同八年二月督姫を産んだ（『寛政重修諸家譜』）。

西郡局は慶長十一年（一六〇六）五月十四日、伏見城内で死去したが、熱心な法華信者であったので、法華宗の本禅寺に葬られた（法号「蓮葉院日浄」）。本禅寺には、西郡局の父長忠、大久保忠隣の墓もあ

る。家康は側室や家臣の宗旨を尊重し、その信心や供養を否定しなかった。<sup>11)</sup>

天正十一年（一五八三）八月、家康は甲斐国をめぐって対立していた北条氏直と講和を結ぶにあたり、督姫（十九歳）を氏直に嫁がせた。その後、秀吉の小田原攻めで小田原城が落ち、氏直は赦免されて一万石を与えられるが、天正十九年（一五九一）十一月四日、疱瘡を病み死去した。

子のなかった督姫は、秀吉の仲立ちにより、文禄三年（一五九四）十二月、三十歳で三河国吉田城主池田輝政に再嫁した。夫は関ヶ原合戦の功績で慶長五年（一六〇〇）、播磨五十二万石、姫路城主となった。督姫に忠継・忠雄・輝澄・政綱・輝興の五人の男子が生まれ、夫輝政は西国随一の大名となるが、中風を煩い慶長十八年（一六一三）一月二十五日、姫路城において五十歳の生涯を閉じた。<sup>12)</sup>

翌慶長十九年（一六一四）の大坂冬の陣には息子たちが馳せ参じた。督姫も父家康を見舞うが、その滞在中に疱瘡を患い、翌年二月四日、二条城で病没した（命日は五日、五十一歳）。息子の忠継も母死去から十八日後の二月二十三日、母と同じ疱瘡のため岡山城で病没した。

### ③ 塔頭良正院

督姫の葬儀は、家康の上意により知恩院満普尊照を導師として執行された。知恩院の裏山に埋葬され、遺影と位牌は知恩院方丈に安置された。

法然上人の御廟のある裏山、勢至堂へと向かう石段を上り詰めた知

恩院総墓地の一角に、石柵で囲まれた墓域の中央に、「慶長廿年二月五日 良正院殿智光慶安大禅定尼」と、督姫の法号が刻まれた五輪塔が西に面して建っている。

後に岡山城主となった督姫の子息忠雄には、母の埋葬地である知恩院山内に菩提寺を建立する宿願があり、母の弟の將軍秀忠の許しを得た。知恩院では、有力な役者（寺務僧）宗把の住房浩翁軒（院）をもつて菩提所とすることにした。寛永八年（一六三一）に造営になると、供養料五十石が寄進され、寺号も法号の良正院に改められた（良正院文書「池田忠雄書状」）。<sup>13)</sup>

良正院殿（督姫）御追善として、相国様（秀忠）え窺いの上、其の寺建立候、御供養米五拾石、永々差し贈るべく候。猶、御仏前に於いて、武運長久・国家安全の祈願頼み入り候。永く其の寺檀那たるべく候。恐惶謹言。

十一月朔日

宰相忠雄（花押）

良正院宗把老

その後、良正院は忠雄の子光仲が因幡鳥取城主に国替えとなり、以後は鳥取藩主池田家の菩提寺となった。

知恩院では、毎年七月五日、良正院殿御水向法要が山上墓所においてあり、鳥取藩京都留守居から供養料が納められた。

寛保元年『日鑑』七月五日

一、例年の如く、良正院殿御水向法要、山上御墓所において執行。施餓鬼・長奉請・弥陀経・後唄。畢つて、御齋有り。且つ亦、御施物ハ大衆三錢目宛、衆外・行者ハ弍錢目宛之を下

され候事。尤も大僧正（四九世称誉真察）御出也。

一、松平相模守殿（鳥取藩主池田宗泰）も使者植村与左右衛門（京都留守居）を以て、残暑甚だ候得共、弥御勇健珍重に存じ奉り候。随て例年の如く、良正院殿御水向相備え申候。宜しく御供養頼み奉り候の由にて、白銀五枚持参。則ち月番罷り出、挨拶に及び、ご返答申す。

また、雨天の場合は、本堂（御影堂）の東仏壇において法事があり、その際には墓所が見えるように山側の障子が開けられた。<sup>14)</sup>

### 第三 松平定勝・定綱と念仏寺一切経

#### ① 松平隠岐守定勝

永禄三年（一五六〇）、十九歳の家康は、尾張阿古居の久松俊勝の屋敷に母を訪問、三人の弟康元・勝俊・定勝に松平の姓を与え、葵の紋章の使用を許した。定勝は生まれたばかりであり、家康は「長福（定勝の幼名）は今年生まれて、襁褓の中より見え奉る事の嬉しさよ」と喜んだ（『徳川実紀』）。

成人した定勝は、慶長五年（一六〇〇）、関ヶ原合戦では遠江掛川城を守り、掛川領主三万石、隠岐守に任ぜられた。同七年の春、家康の招きで母が上洛するとき、康元と定勝の嫡子定行が同行している。上述した於大がその年の八月二十八日、伏見城で死去、知恩院での葬儀・法会の後、江戸に遺骸が送られるのには定勝が随行している。

家康は定勝の娘を自身の子として養い、慶長十年（一六〇五）四月、

化粧田千石を付け、山内一豊の子国松に嫁がせた。定勝は慶長十二年、家康が天下板要の地とした伏見城代五万石となると、掛川三万石を定行に譲り、大坂冬の陣では伏見、夏の陣には京都二条城を守護した。元和三年（一六一七）、定勝は伊勢桑名城主十一万石に移封となり、家光は同九年の上洛時、桑名城に立ち寄っている。定勝は、寛永元年（一六二四）三月十四日、腫れ物により桑名で没（六五歳）、法号は「崇源院殿靈巖円徹」である。定行は父の菩提のため、父が母伝通院の位牌を安置、菩提所とした掛川天然寺より、伝誓三甫を迎え崇源寺（後、照源寺）を創建、寺は知恩院末寺となった。

#### ② 松平越中守定綱

定勝の三男定綱は、慶長七年（一六〇二）、家康に謁して秀忠に仕えた。秀忠は元和九年（一六二三）伏見城が廃城となると、定綱に命じて、大坂から京都に入る要衝地の淀に城を修築した。定綱が初代藩主として寛永二年（一六二五）に入城した淀城は、五層の天守を持つ堂々の構えであったが、慶応四年（一八六八）の鳥羽・伏見の戦いで破壊され、城壁をとどめるだけとなった。

寛永十年（一六三三）一月九日、知恩院の伽藍が炎上した際には、知恩院の要請により、淀藩主定綱と高槻藩主松平紀伊守家信は人足を提供している（宗把「知恩院炎上次第書」<sup>15)</sup>）。

その一か月後の二月十一日、定綱の妻浅野長政の娘（智相院）が淀城で死去した。定綱は生前の帰依により、知恩院三十二世雄誉靈巖に葬儀導師を依頼した。また、火事で蟄居中の靈巖のため、淀城の妻の



居室を知恩院に仏殿として移築（智相院、後の入信院）し、供養料として伊勢の地百石を寄進している。<sup>16</sup>

### ③ 定勝・定綱と袋中上人

定勝は伏見城代として伏見に滞在中、浄土宗の学僧で琉球国に渡り、国王尚寧の帰依をうけ桂林寺を建立、慶長十四年（一六〇九）に帰洛、木幡浄土寺に滞在していた袋中良定に深く帰依している。定勝は、

浄土安心起行のありさま、本願念仏のいみじきことも、御聴聞ありて、深く上人の化導に帰依し玉ふ。やがて師弟の契約浅からず。その後は寒暑の音問、四事の供養に至る迄、相統して絶ることなし。

と深い契りを結んだ（以下『涅槃山菩提院袋中和尚略伝』<sup>17</sup>）。

定綱もまた「先考（父定勝）の遺徳を追ふて、ますます（袋中）上人に帰依まし、浄業不退の大信者となり、日々、日課念仏ためみ玉ふ事なし」とのことであった。

定綱は、上人に帰依するばかりでなく、京都所司代板倉周防守にも、「東山（知恩院）御仏詣あらせられ候はゞ」必ず三条橋詰の（檀王）法林寺を訪問するようにとすすめている。所司代は袋中の「本願念仏の効能、浄土の安心起行の趣」を聴聞すると、渴仰のあまり師檀の契約を結び、法林寺の伽藍再興を支援した。

### ④ 南都念仏寺一切経と知恩院

南都の隆魔山念仏寺（奈良市漢国町）は、伏見城代定勝の建立、袋

中開基の寺である。子息定綱は、父の遺言により位牌殿を建立し菩提所とし、祖母伝通院の位牌を安置するとともに、家康・秀忠・家光の三代將軍の法号の掛け物を寄進している。<sup>18</sup>

袋中は、念仏寺に定勝の菩提のため経堂を建立すると（棟札）、経堂に浄瑠璃寺の堂舎が破壊し、散佚しかけた一切経を譲り受けるとともに、一蔵全備したことが『袋中上人絵詞伝』に、

脱巻逸帙の経論をば、或はみづから書写し、或は他をたのみて書写せしむ。これによりて経論欠くることなく、一蔵全備せり。その中に紺紙金泥の経論多し。今、南都念仏寺の蔵本これなり。

と見える。<sup>19</sup>この袋中手沢の写経を、嘉永五年（一八五二）に調査、蒐集したのが、明治七年（一八七四）知恩院七十五世となる養鸕徹定である。徹定がこのとき蒐集し、知恩院宝蔵に寄贈したのが渡来品の『菩薩処胎経』（西魏時代）、『大樓炭经』（唐時代）であり、国宝に指定されている。<sup>20</sup>

## 第四 千姫供養と知恩院・伊勢寂照寺

### ① 千姫と飯沼弘経寺

大坂落城までの十一年余り、千姫と秀頼には子どもは生まれなかった。秀頼には側室がいて、慶長十三年（一六〇八）に国松を、翌十四年に娘を産んでいる。八歳の国松は大坂城落城の日、豊臣家再興を託され脱出したが、逮捕され、五月二十三日に六条河原で斬首され、遺体は誓願寺に埋葬された。娘は命を助けられ、後に千姫の養女（天秀

尼」となり鎌倉の尼寺東慶寺に入った。

千姫は父秀忠のいる江戸城に引き取られ、元和二年（一六一六）九月、家康の遺命により、伊勢桑名城主本多忠政の子忠刻に嫁いだ。千姫には、化粧料十萬石が与えられた。義父の本多忠政の妻は家康の子信康の娘であることから婚儀の実現であり、忠政は翌元和三年播磨姫路城主となった。

千姫は忠刻との間に、一男一女をもうけた。娘は成長して岡山藩主となる池田光政の室となった。息子が夭折したことを秀頼の怨霊のためかと畏怖した千姫は、伊勢慶光院の周清尼に供養を依頼、周清尼は秀頼自筆の名号「南無阿弥陀仏」と祈願文を観音像の胎内に納めて祈禱している<sup>21</sup>。

千姫は、寛永三年（一六二六）五月七日に夫本多忠刻が姫路城で没し、九月十五日に母の將軍秀忠夫人小督（崇源院）が亡くなると、その年の十二月、飯沼弘経寺十世の照誉了学に請い、浄土宗の奥義と五重伝法を受け、「天樹院殿吟普源法大師」を授けられた。了学は、祖父家康・父秀忠の授戒の師であり、後陽成天皇から紫衣綸旨を賜った高僧である。秀忠の要請により増上寺十七世となり、秀忠の葬儀導師をつとめている<sup>22</sup>。

千姫の弟將軍家光は、竹橋門内に屋敷を与え、出家した千姫を優遇すると、大奥などに隠然たる力を持ち、家光の次男綱重の養育にもあたった。千姫は弘経寺を菩提所と定めると、本堂以下の堂舎修築のため莫大な寄進をし、諸堂が完成すると染筆「弘経寺」の額を贈った。晩年の千姫は、弘経寺の十八世玄誉万無を邸宅に召き浄土宗の法問を

聴聞している。

万無が浄土宗の発願文、善導大師の『往生礼讃』の中にある一文である「到彼国已得六神通入十方界救摂苦衆生（浄土に往生して阿弥陀仏を見奉りて、六神通を得てのちに、還つて穢土の衆生を救わん）」を説講した。

浄土へ往生した後には、松平の子孫を守りたいと発願した千姫は、自身の思いを院号に籠め置くことを望み、万無より「天樹院殿」の次に「栄誉源法松山」を授与された。

万無が千姫にその意味を「栄誉とは御子孫栄昌の義、松平の御代堅固不動の義、源法とは浄土の法門は、東照宮（家康）、別て御帰依あらせられければ、源氏の法門の義に候」と教えると、ことに喜び、いよいよ信心を増信した<sup>23</sup>。

## ② 玄誉知鑑と千姫葬儀

千姫が寛文六年（一六六六）二月六日、七十歳で亡くなると、幕府は、弘経寺十六世相閑が住職をする伝通院において、同寺十五世で総本山知恩院三十七世の玄誉知鑑を招聘し、葬儀を執り行なった。

知鑑は銀三百枚・小袖十・米百俵の布施を賜り（『徳川実紀』）、御菩提所の定例により知恩院にも分骨された。また、永代常行念仏のための祠堂銀が下賜され、勢至堂に位牌を安置、背後の眺望絶景な濡髪祠前に宝塔が建立された。

「御菩提所知恩院御由緒」には、千姫追善供養と勢至堂永代常念仏（不断念仏）について、次のように記載されている<sup>24</sup>。

一、台徳院様（二代將軍秀忠）御長女天樹院様（千姫）御逝去の節、御帰依により、知恩院方玄普知鑑上人え、御導師仰せ付けらる。参府、則ち御導師・御焼香相務めらる。御寄附物数多御座候。且つ帰京の上、知恩院山上へ御分骨御納め、御宝塔迄御建立あらせらる。其上、御追福のため尊牌御安置、本地堂（勢至堂）において、永代常念仏相勤むべく旨仰せ付けらる。結構に御祠堂銀下し置る。只今に退転なく相勤め来り候。

千姫の葬儀導師について、弘経寺の古記録は、本来は現住の玄普（万無）であったが、相閑が幕府に「玄普」とのみ報告したため、知恩院の玄普知鑑が依頼されたとしている。そして、「当今、檀林当住職の尊号を、諸檀林の諸所化に用ゆる事は、一同の制となりし事、此時より初れり」と伝えている（同上『飯沼弘経寺志』）。

### ③ 伊勢寂照寺と月僊

葬儀導師を勤めた玄普知鑑は、十三歳で將軍秀忠の生母（西郷氏お愛）の菩提所である駿府宝台院の登普知童（増上寺十九世）の室に入った。四十六歳のとき、檀林川越蓮馨寺（九世）の住職となるが、このとき近村に破損した源信作阿弥陀像があることを知ると請い受け、修復したのが知恩院集会堂の本尊（現在・大方丈仏間）である。

檀林飯沼弘経寺から檀林鎌倉光明寺（四十二世）を経て、寛文三年（一六六三）十二月、知恩院三十七世となった。在任中に秀忠の三十三回忌、家康五十回忌を厳修、寛文十一年（一六七二）には、御影堂の大修理を行っている。

玄普知鑑は、延宝二年（一六七四）四月、知恩院を辞山すると、家康の側室お夏が家康の菩提を弔うため建立した伊勢山田の清雲院に退隠、近くに千姫追福のため栄松山寂照寺を創建、同六年清雲院において遷化した（七十三歳）。

寂照寺は檀家のない寺であったため、次第に窮乏した。荒廃を嘆いた知恩院五十七世檀普貞現は、安永三年（一七七四）、その再興を画僧の月僊に依託した。

月僊は、寛保元年（一七四一）名古屋の味噌商人の家に生まれ、捨世主義をとり浄土律を興隆させた関通上人ゆかりの名古屋円輪寺で得度、増上寺学寮に入った。増上寺四十六世名普定月に絵の才能を見いだされると、上京して知恩院で修行するとともに、円山応挙に師事し、与謝蕪村の影響を受け、中国絵画を学んだ。

寂照寺住職となった月僊は、描いた絵を売り寺運を回復させるとともに、宇治山田奉行所に貧民救済の資金として画料金千五百両を寄進するなど社会福祉事業に力を尽くし、文化六年（一八〇九）正月十二日、六十九歳の生涯を閉じた。<sup>25)</sup>

知恩院什宝に、月僊が御影堂の法然上人像を写し、上部に檀普貞現が勢至円通の賛を書いた「法然上人像御影」「関帝昇降竜図」「古人遊賞図」「草花図」等がある。

## 第五 一条大政所（輝姫）と勢至堂万日回向

### ① 一条大政所（輝姫）と知恩院

知恩院には「当院常念仏中興大旦那」である千姫とその娘・孫娘の位牌を納めた御厨子があり、勢至堂において供養されている。御厨子中央に天樹院（千姫）、左側に本多忠刻と千姫の長女で池田光政の室で綱政の母である円盛院（勝姫、将軍秀忠養女）の位牌、右側に円盛院の娘で右大臣一条教輔に嫁ぎ、関白兼輝の母である靖巖院（輝姫、池田光政二女、将軍家光養女）の位牌が納められている。<sup>26</sup>

千姫の孫娘輝姫（輝子）の廟堂知恩院への深い帰依を紹介しておく。輝姫は千姫と本多忠刻の娘勝姫が将軍秀忠の養女として嫁いだ池田光政の二女として、寛永十三年（一六三六）五月二十二日に生まれた。輝姫は将軍家光の養女として一条教輔に慶安二年（一六四九）十二月二十五日に嫁いだ。慶安五年（一六五二）四月十三日、長男兼輝が生まれ、夫の一条教輔は承応四年（一六五五）右大臣となり、万治二年（一六五九）に辞すと、息子兼輝が万治四年（一六六一）右大臣となっている。

輝姫の祖母千姫は寛文六年（一六六六）二月六日に逝去（七〇歳）。母勝姫が延宝七年（二六七九）十月が逝去（六一歳）すると、将軍家の京都菩提所である知恩院に紺紙に金字で自ら書写した浄土三部経を奉安、母を供養している（源輝子知恩院奉安浄土三部経『阿弥陀経』巻尾）。

吾聞、信受誦持盛於今日、莫若浄土三修多羅、自非有縁何得、而爾功通驗速豈可議耶、緣是三部経四卷書以金泥、安于洛東智恩精舎、奉為先妣圓盛院殿高居士七寶勝妙臺焉、所冀、安養慈尊及諸菩薩冥薰和、被誘彼淑靈者也、

延寶七年歲次己未十月五日 從三位源輝子

子息兼輝は天和二年（一六八二）関白となり、貞享四年（一六八七）には東山天皇の摂政・関白をつとめ、靈元上皇の院政を補佐している。輝姫は、元禄十一年（一六九八）二月、知恩院において祖母千姫三十三回忌をつとめ、仏参したことが『日鑑』に記載されている。<sup>27</sup>

輝姫の子兼輝は親に先立ち宝永二年（二七〇五）九月一日死去（五四歳）、次いで夫教輔が宝永四年（二七〇七）一月六日、死去（七五歳）している。

法然上人と浄土宗の信仰を深めた輝姫は、正徳二年（二七一二）九月二十三日、知恩院に参詣すると「大師（法然）御骨」「神変不思議之舍利」を御拝、大僧正（四三世応誉円理）より御十念を授与されると、紗綾二巻・伊部焼の花生・獅子の香炉を寄進している。ついで、徳川家の位牌を安置する大方丈本尊を拝み、祖母千姫と母勝姫の位牌前に香典として金貳百足を遣わし、勢至堂、御廟（千姫墓塔）、法然御廟に参詣したことが『日鑑』九月二十三日にみえる。<sup>28</sup>

輝姫は、翌正徳三年（一七一三）五月二十二日の奥書のある浄土三部経を知恩院に奉安している。『阿弥陀経』巻尾には、輝姫の夫の後唯心院右大臣藤原朝臣教輔公、夫妻の子女である圓成寺殿前関白藤原朝臣兼輝公・慧照院殿以清圓鑑童子・玄心智空大童子・芳桂院殿弧月清光童所・涼臺院殿浄智元祐童子・智雲院殿月岑自照童子の六名。輝姫の祖父母である圓泰院殿前中書黄山蒼雄大居士（本多忠刻）と天樹院殿榮誉源法松山大禪定尼（千姫）。輝姫の両親の通源院殿前羽林次将天質義晃大居士（池田光政）と圓盛院殿明誉光岳泰崇大姉（勝姫）。

それに、慈雲院殿梵音性海大師、清鏡院殿照普靈光大信女の法号が記され供養されている。

右所奉書写浄土三部経妙典、寄置之東山知恩院勢至堂、以彼是有縁之地也、伏願籍此良縁、乃令上件連署靈鬼、速昇八池圓徳之寶殿、疾躋三身即一之大果者也、

正徳三年癸巳年五月廿二日

従三位源輝子

この輝姫書写の浄土三部経は、輝姫の帰依する義山により卷子に仕立てられ、知恩院に翌正徳四年（一七一四）四月二十九日に納められた。『日鑑』同日条には、輝姫のこの浄土三部経書写は、父池田光政三十三年の菩提を弔うためであったことが、

一、一条大政所御方御染筆三部妙典、箱入にて、義山より請取り候。是ハ当年松平新太郎殿（池田光政）三拾三年御菩提ため遊され候由、此度当山勢至堂え相納め申すべく由。

と記載されている。

輝姫は享保二年（一七一七）四月十四日、八十二歳で逝去。その臨終の善知識は義山が勤めている。輝姫の遺言により東福寺へ葬送された。

『日鑑』四月十五日

一、一条政所様、十四日の夜、丑ノ刻、御逝去遊され候。御遺言ニ而東福寺へ御葬送の由、御当山ニても御法事御執行下され候様ニ、追て仰せ遣わされべく旨、御使者榎島与惣兵衛、信重院迄参り申置き候由。

廿六日

一、一条政所様御葬送二付、亥刻、東福寺において諷経。御代僧として清光寺并に靈雲院・常称院・忠岸院、東福寺へ罷り越し候。三人の御局方へ、御土産遣わされ候。御使僧善龍・片山伊賀（行者）罷り越し候。

五月二日

一、御丈室（四五世然誉沢春）、一条様へ御悔ニ御越し。内諷経御勤なされ候。但、納経并に野菜一籠遣わされ候。靈雲院御供、御非時出候由、御相伴義山和尚。

一条家より知恩院に法事執行の依頼があり、六日に施餓鬼法事があった。

一、靖巖院様御法事仰せ付けらる。巳ノ上刻より御施餓鬼御執行。御代参諸大夫、一条様より納経一部。智君御方より金三百足御香典。常陸・石見・播磨より銀一封宛。外二銀貳両宛三包。但し、御布施金拾両御上ケなされ候。

そして六月一日、大政所御所より、前述した天樹院殿・円盛院殿・靖巖院殿の位牌を一つに祀る新造の厨子が届けられ、六月八日より勢至堂において靖巖院殿四十八夜別時念仏が開闢した。

## ② 勢至堂万日回向

江戸時代、一日参詣すると万日分の功德に値するとされる万日回向は、庶民に人気の法会であった。知恩院の万日回向は天樹院（千姫）の菩提回向のため、天樹院の寄付金をもって執行されていた。

一万日回向は、千姫二十五回忌に当たる元禄三年（一六九〇）三月



八日より十六日迄の法要であつた。孫娘の大政所（輝姫）は、千姫の命日に知恩院に参詣、また万日回向には香奠と御進物を届けている。

二月五日

一、天樹院殿御法事、初夜七ツより初む。寺中大衆・方丈内所化五人ニテこれを勤む。大方丈御位牌莊嚴、大けそく盛物二つ・小けそく二十四・前菓子。圓盛院殿御位牌前、けそく二つ。四奉請・阿弥陀經・初夜礼讃・行道、并に一夜念仏開闢。

二月六日

一、朝、觀經読誦・伽陀・廻向。門中一老二老兩人、方丈内所化五人・寺中大衆・六役衆五人。飯斎、四奉請・阿弥陀經、御齋一汁三菜・菓子迄。施餓鬼法事、右之人数念仏廻向。大政所様御成り。施餓鬼法事御会なさる。その後、勢至堂へ御成り。八つ過ぎ還御。

三月八日

一、万日廻向の開闢四つ半に始。初夜、御名代の焼香一心院。後夜・晨朝、欣誉へ仰せ付けられ候。

三月十二日

一、大政所様へ昨日御代参、香奠并に御進物参り候御礼旁々、御使僧栄玄遣わされ候。三重折進ぜられ候。

三月十六日

一、万日念仏惣廻向、四つ前并に開闢。念仏廻向の結衆四拾人、御布施下さる、御暇。其の外、寺中大衆・一心院・勢至堂・欣誉・方丈内僧衆残らず御布施下され候。

一、大政所様より、念仏廻向首尾能く相済み候由にて、御使者参り候二付、御礼旁、徳林院・保徳院相添、御使僧二惠誉参り候。二万日回向は享保三年（一七一八）三月八日より十五日迄、御影堂において「勢至堂不断念仏二万日回向」として執行されている。二万日回向執行につき、知恩院役所よりの申渡しを紹介しておく。

享保三年『日鑑』三月三日

一、二万日廻向の儀、大衆中・行者・各庵・代官、万事申渡候覚え。開闢廻向、両度共惣出仕。その余ハ勝手次第。本堂勤行、朝夕常の通り。但シ、夜ハ参詣停止。善導忌、朝夕例年の如し。十五日法事これ無し。祭礼もこれ無し。鎮守へ備え物計り上ル。廻向の後、御祝儀申上の筈。十五日朝ハ、寺中挑灯出すべくのこと。門前は昼の内。自身番、先年の通り仕るべく候事。

右、万々先格の通り申渡し候事。

三万日回向は千姫百回忌に当たる明和二年（一七六五）三月十日より十九日迄、十日間の法会として勤められた。当初、三万日回向は、明和二年三月六日開闢、十五日に総廻向・総供養施餓鬼の予定であったが、徳川御三家の紀伊中納言（徳川宗将）が二月二十六日に逝去、三月三日の夜、三日より九日迄鳴り物停止の御触書が届いた。翌四日、知恩院では急遽、市中の張り札の日付を書直し、大坂・堺へも通知を出した。奉行所には、延引の書付とともに、中日十五日よりの難色警固、御忌と同格の法会であることより、大鐘を撞くことの届けを出している。

九日には池坊の門弟が登山し、立花両瓶は松の一色、御忌の通り行

われた。十日の早朝、法会開闢を知らせる大鐘が撞かれ、五十四世曹  
誉沢真大僧正は、毎日の日中回向に出座し御十念を授与した。

## 第六 円光大師号と勢至堂墓地・浄琳院廟所

### ① 桂昌院と五重血脈

桂昌院は、寛永四年（一六二七）、京都堀河八百屋仁左衛門の娘と  
生まれ、関白二条光平の家司本庄宗利の養女となった。家光の側室と  
なると、正保三年（一六四六）正月、四男徳松（綱吉）を産んだ。家  
光没後は、綱吉の館林藩邸に移り、綱吉が將軍に就任すると江戸城に  
入り、三の丸殿と呼ばれた。

桂昌院は、真言宗の亮賢・隆光に帰依し、幕府祈願所護国寺を建て  
ると、亮賢を開山に迎えた。また、桂昌院は隆光とともに、綱吉の  
「生類憐みの令」の発布にかかわったとされている。

信仰心の厚い桂昌院は、浄土宗にも深く帰依し、増上寺の諸廟参詣  
のあと、しばしば浄土宗の法門を聴聞している。元禄九年（一六九  
六）八月二十九日、増上寺に仏詣すると、三十二世住職貞誉了也より  
五重血脈を相承した。宝永二年（一七〇五）六月二十二日、八十二歳  
で死去すると、翌日遺骸が増上寺に移された。將軍綱吉の悲歎は大き  
く、六月二十七日開白した葬礼の千部説経は、七月二十九日に結願す  
るという、実に一ヶ月に及ぶものであった。<sup>①</sup>

### ② 円光大師の諡号

大師号とは、高僧・名徳に死後、その功績をたたえ、徳を表すため  
朝廷より授けられる諡号のことである。法然上人に朝廷より諡号「円  
光大師」が贈られたのは、上人滅後四百八十六年にあたる元禄十年  
（一六九七）のことである。<sup>②</sup>

元禄七年（一六九四）正月、將軍綱吉より知恩院四十二世を命ぜら  
れたのは、伝通院十四世白誓秀道である。前住の伝通院十三世は、將  
軍綱吉と母桂昌院が帰依した貞誉了也である。

白誓秀道は知恩院住職となると、増上寺住職貞誉了也をとおして、  
綱吉側近の柳沢吉保に贈大師号について相談している。白誓秀道は元  
禄九年（一六九六）四月、京都三ヶ寺本寺の金戒光明寺・百万遍知恩  
寺・清浄華院の賛同を得ると、増上寺を通して宗祖諡号の儀を正式に  
幕府に願ひ出た。十月十二日、京都所司代小笠原長重より知恩院に幕  
府の許可が伝えられた。東山天皇の贈号勅許は、十一月十一日に明正  
上皇（二代將軍秀忠孫娘）が崩御（七十四歳）したこともあり、翌元  
禄十年一月二日に伝えられた。一月十八日、東山天皇の勅書を戴く勅  
使が知恩院御影堂に到着すると、贈号を慶祝する円光大師贈号法要が  
厳修された（『円光大師贈号絵詞』）。

### ③ 勢至堂墓地と尼門跡

京都には天皇家とゆかりの深い尼門跡の寺院（比丘尼御所）が九カ  
寺ある。浄土宗寺院は上京区の三時知恩寺（入江御所）と光照院（常  
磐御所）である。

後水尾天皇の皇子で將軍秀忠の娘東福門院を母とする後西天皇（実

母は逢春門院）の皇女たちも出家し七カ寺の尼主となっている。

八歳で光照院に入った寿宮は、清浄華院天誉雲龍を戒師として十二歳で得度（法名尊慶）、享保四年（一七一九）亡くなると華開院に葬られた（四十五歳）。その妹の貞宮は六歳で三時知恩寺に入り、九歳で得度し尊勝と称した。『日鑑』によると、元禄十六年（一七〇三）

二月二十八日、尊勝はお連れ一向と知恩院に花見に登山している。唐門より小方丈に入り、住職白誉秀道と対顔のあとお茶屋で馳走になっている。尊勝はその翌月、三月二十五日の朝、七ツ時に逝去（二十八歳）した。知恩院より悔やみの使僧が遣わされ、翌日、廟所を勢至堂の裏にとの望みで墓域が決定している。

尊勝の墓塔である宝篋印塔は、勢至堂墓地の東崖に西面し、三時知恩寺の歴代尼門跡の墓塔は千姫の墓の南隣にある。

#### ④ 浄琳院二品内親王廟所

徳川家ゆかりの女性の廟所として、忘れてならないのが浄琳院廟所である。元禄九年（一六九六）十一月の二代將軍秀忠孫娘である。明正上皇崩御の後、將軍家は天皇家との結びつきを強固にするため、天皇の娘との婚姻を望んだ。

浄琳院とは、靈元法皇の姫宮八十宮のことである。正徳五年（一七一五）九月二十三日、わずか二歳で七歳の七代將軍家継との間に婚約が成り、翌正徳六年（一七一六）二月十八日に結納の儀が行われた。天皇の姫宮と徳川將軍の婚約は、これまでに例のないことであり、八十宮は七歳になる五年後に江戸下向が予定された。

しかし、家綱が結納が交わされた二ヶ月後の正徳六年四月三十日に死去（法号有章院）、八十宮の江戸下向もなくなり、幕府から終身五百石を与えられ京都で暮らすことになった。享保十一年（一七二六）十一月二十八日、内親王宣下があつた（吉子内親王）。

『日鑑』によると、八十宮の御所からは、毎家継の命日四月三十日には、香奠と草花一筒が届けられ、八十宮の家司が代拝し、住職に宮の口上を伝えていた。延享三年（一七四六）四月二十五日には八十宮が仏参し、饗応を受けている。<sup>33</sup>

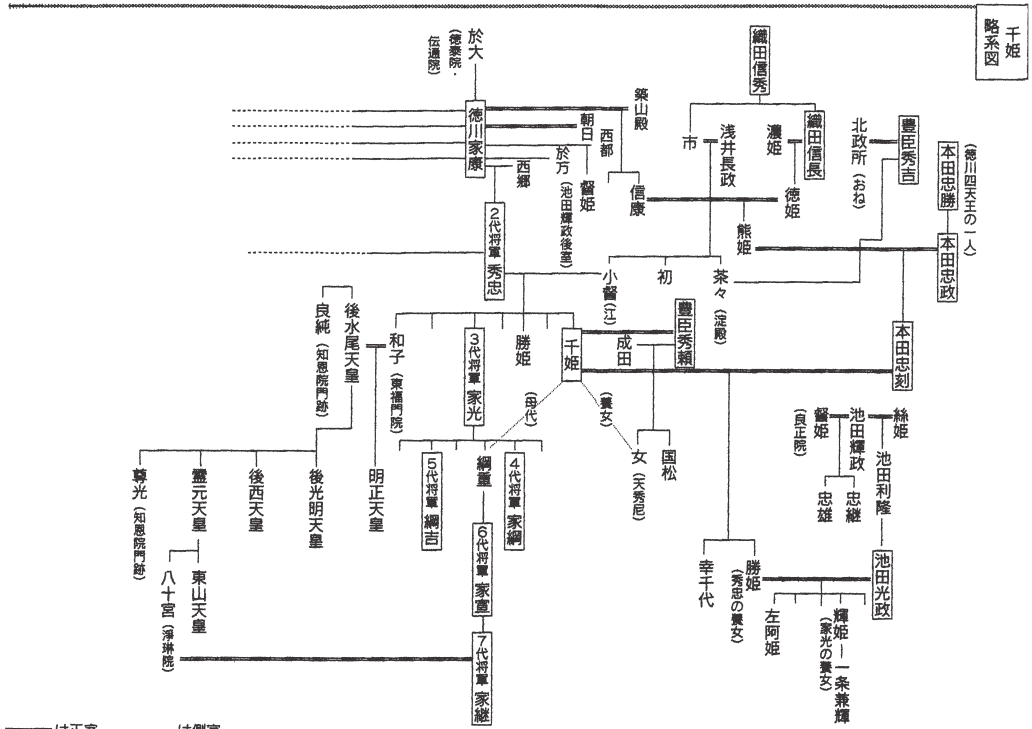
宝暦八年（一七五八）九月二十二日、四十五歳で亡くなると、遺言により知恩院に葬られた（法号浄琳院）。

#### おわりに

以上、本論では將軍家の京都菩提所としての知恩院を、徳川家ゆかりの女性の浄土宗帰依、追善供養と回向の歴史を中心に紹介した。

日本人と寺院の歴史を研究するとき、日本仏教が宗派単位で存続しているため宗派の影響を考慮する必要がある。全国には住民が菩提所とする寺院が七万五千九〇〇カ寺ある。その内、一万二千六五カ寺が住職不在（兼務寺・無住寺）である。これらの寺院は、本稿で考察したような徳川將軍家の手本にならない、葬式と年忌仏事のために住民の先祖が建立し、住職を招聘した寺院（菩提所）である。教団や僧侶が建立したものではない。<sup>34</sup>

寺院を仏教と考えるなら、仏教は日本全国にひろまっている。寺参



※本図は千姫研究会編『千姫ものがたり』（2005年水海道 TMO 水海道まちづくりネットワーク）、姫路文学館『江の娘、千姫』（2011年）を参照

りを仏教信仰とするなら、日本人のほとんどは仏教信者である。人は亡くなると戒名をもらい、位牌を作成、過去帳に記入、墓地に石塔を建立し納骨をする。

また、家の仏壇にはお茶やお花、霊膳を供え、毎朝お参りをする。戒名の問題を宗教学者達は議論するが、浄土は信仰の世界である。仏の弟子となり浄土に往生するわけだから、仏弟子となった象徴として戒名がある。仏教経典や僧侶の導きにより、我々はお寺にお参りをする。しかしその背景に、『論語』『孝経』に説く儒教の「孝」の思想が日本人の伝統的道徳の基底にあり、思考や行動の規範になっていることを忘れてはならない<sup>36)</sup>。

先祖や父母に感謝する気持ち、子どもの存在がなければ、檀家の集団的菩提所である全国の寺院は崩壊する。寺参り（墓参り）を仏教信仰とする日本人の信仰史を明らかにする責任が研究者にはある。崩壊する村落共同体、民俗文化を考える上でも大切なことである。日本人が歴史の展開するなかで「仏教」と出あい、宗教としていかに信仰してきたのか、日本人と「仏教」との関係を通して、その精神生活の変遷、信心と供養の歴史を明らかにすることに取り組む必要がある。

#### 〔注〕

（1）拙稿「戦国期の法然上人信仰と廟堂知恩院」（藤本浄彦先生古稀記念論文集刊行会編『法然仏教の諸相』、法蔵館、二〇一四年）、同『知恩院と徳川家』（総本山知恩院おてつき運動本部、おてつき叢書二七、二〇一五年）。

（2）拙稿「知恩院の「近世」——台命住職と役所『日鑑』——」（福原隆善先

生古稀記念論集『仏法僧論集』第二巻、山喜房佛書林、二〇一三年）及び同「將軍家京都菩提所知恩院とオランダ人の参詣」（佛敎大学総合研究所紀要別冊『洛中周辺地域の歴史的変容に関する総合的研究』、二〇一三年）参照。

(3) 以下、中村孝也『家康の族葉』（講談社、一九六五年）、同『家康伝』（国書刊行会、一九八八年）による。

(4) 中井真孝監修『知恩院史料集 古記録篇二』（総本山知恩院史料編纂所、二〇一六年）に収録。

(5) 元禄十四年『日鑑』八月。

廿八日 晴

一、明廿九日、伝通院様御百年、今夜御法事、弥陀経・初夜讃・中曲念仏畢。御盛物二合、御菓子、御膳等例の如し。御影様（徳泰院像）御開帳。

廿九日 陰

一、今朝御法事。伽陀・小経読経。回向・御半斎。引声奉請・四誓偈・短後唄・念仏畢。善導寺・聖徳寺・浄雲院・春長寺・勝巖院・西園寺・浄円寺・大雲院、当一山出座也。御斎供養。

宝暦元年『日鑑』八月。

廿八日 雨天

一、徳泰院殿百五十回御忌、御逮夜御法事。山内大衆勤行これ在り。廿九日

一、徳泰院殿百五十回御忌、本堂において御法事。（京都）門中一萬婦命院・二藤大泉寺・役中・山内大衆等出勤。御斎正五菜。御門前代官等迄御斎下さる。

一、右、御逮夜御法事。四奉請・重誓偈・初夜礼讃。御斎。御法事。伽陀・観経読誦・回向文・念仏・御回向。

知恩院役所『日鑑』は、知恩院史料集「日鑑・書翰篇」「日鑑篇」として、明和三年（一七六六）『日鑑』（「日鑑」篇三十、二〇一五年）まで、総本山知恩院史料編纂所より刊行されている。詳しくは、拙稿「知恩院の「近世」―台命住職と役所『日鑑』―」（注（2））参照。

(6) 知恩院蔵『御当山開山草創・御菩提所・御祈願所之記』所収。水野恭一郎監修『知恩院史料集 古記録篇一』（総本山知恩院史料編纂所、一九九一年）に収録。於大・家康・秀忠の三像が平成二十八年六月、京都国立博物館で開催された徳川家康没後四百年記念特集陳列に出版された。図録『徳川將軍家と京都の寺社―知恩院を中心に―』（京都国立博物館、二〇一六年）参照。

(7) 『知恩院史』第三篇第六章「史蹟と伝承」（知恩院、一九三七年）、『本願寺史』第二巻（浄土真宗本願寺派宗務所、一九六八年）。

(8) 中村孝也『家康の族葉』（注（3））二五九頁以下。『東福寺誌』（思文閣出版、復刻版、一九七九年）七七九頁。

(9) 中村孝也『家康の族葉』（注（3））、三六三頁以下。

(10) 注（6）参照。

(11) 『池田氏家譜集成』『池田家履歴略記。寺田貞次「京都名家墳墓録」（初版一九二二年。村田書店復刻版、一九七六年）。中村孝也『家康の族葉』（注（3））、水野恭一郎「吉備と京都の歴史と文化」第二部第一章「知恩院塔頭良正院の草創―附・良正院古文書選―」（思文閣出版、二〇〇〇年）参照。

(12) 督姫は、幼少時に痘瘡を患ったが、法華宗の日受上人の祈禱で平癒した。督姫も母や祖父と同様に熱心な法華信者であり、夫輝政没後に剃髪、「華光院殿妙春日殿」と称した。本敎寺蔵「督姫画像裏書」（鳥取市歴史博物館平成二六年度特別展図録『鳥取のお殿さま―天下人と歩んだ池田家―』、二〇一六年）参照。

(13) 良正院文書の翻刻は、水野恭一郎「吉備と京都の歴史と文化」所収「良正院古文書選―」（注（11））参照。

(14) 宝暦八年『知恩院年中行事録』七月五日（注（4））。  
一、良正院殿（督姫・清泰院殿（督姫息池田忠雄）御墓参。一汁五菜の御霊膳二膳（但し、高盛り也。揚げ豆腐・かてん・こんにゃく・葉にんしん・ずいき）。盛物縁高二（饅頭・干菓子、小半斤）。御両方分蠟燭壺丁・油少。奠茶・奠湯之土器小・水向桶等御廟所え遣す。大衆中登山。尊前（知恩院方丈、台命住職）は車寄せより山



駕籠召され、御登山。御霊供・御供養、畢つて施餓鬼。四奉請・弥陀經・念仏一会。但し、雨天の節は、本堂（御影堂）東仏壇にて山

の方を開け、法事これ有り。一山へ御齋これ有り（但し、山内大衆及び行者・一萬えは銀三匁ツ）。衆外・其の外の行者えは式匁ツ、御施物遣ス。右施物、御内証より包み出し候事。

(15) 水野恭一郎『吉備と京都の歴史と文化』所収「良正院古文書選一」

(注(11)) 参照。

(16) 『知恩院史』第三篇第三章「塔頭誌」(注(7))。

(17) 横山重編著『琉球神道記 弁蓮社袋中集』（角川書店、一九七〇年）所収。袋中については、信ヶ原良文・石川登志雄「檀王法林寺 袋中上人―琉球と京都の架け橋―」（淡交社、二〇一一年）参照。

(18) 天保十年二月、念仏寺貫誓が松平越中守御役人中に差し出した「御由緒大略」（念仏寺蔵）参照。横山重編著『琉球神道記 弁蓮社袋中集』

(注(17)) 所収。

(19) 横山重編著『琉球神道記 弁蓮社袋中集』（注(17)) 所収。

(20) 藤堂祐範『増訂新版浄土教文化史論』（山喜房佛書林、一九七九年）、

京都国立博物館編『知恩院の仏教美術』（養鸕徹定上人没後一〇〇年記念特別展覧、総本山知恩院、一九九〇年）、寺本哲栄編『徹定上人』

（総本山知恩院、一九九〇年）、『仏教文化研究』第三六号「養鸕徹定上人特集号」（浄土宗教学院、一九九一年）等参照。

(21) 千姫の生涯、秀頼自筆六字名号、周清尼自筆願文等については、橋本政治『千姫考』（神戸新聞総合出版センター、一九九〇年）、『江の娘千姫』（姫路文学館、二〇一一年）参照。

(22) 『大本山増上寺史 本文編』第二編六「徳川幕府と増上寺」（大本山増上寺、一九九九年）。関東における浄土宗寺院の展開、宗侶の活動、

また徳川家と浄土宗寺院との結びつきについては、玉山成元『普光観智国師―近世初期における浄土宗の発展―』（白帝社、一九七〇年）、

同『三縁山増上寺』（大本山増上寺教務部、一九八七年）、宇高良哲『近世関東仏教団史の研究―浄土宗・真言宗・天台宗を中心に―』（文化書院、一九九九年）、同『近世浄土宗史の研究』（青史出版、二

〇一五年）を参照。

(23) 『飯沼弘経寺志』（『浄土宗全書』第十九）に、天樹院（千姫）が玄誓（万無）より聴聞した次の法義を掲載している。

或時、公主（天樹院）の御簾外にめされ、玄誓、「到彼国已得六神通入十方界救摂苦衆生」と云へる祖釈を説講の時、公主、御身にも浄土へ往生の後、六神通を得て此世界へ還来し、松平の御子孫を守らせ遊ばされたきとの意願を発せられ、此発願の意を寿号に籠置され度とのむね、玄誓へ仰せありしかは、御院号の次へ「栄誉源法松山」と連続授与し奉りけるに、其意を尋させられし時、「栄誉」とは御子孫栄昌の義、「松山」とは松平の御代堅固不動の義、「源法」とは浄土の法門は東照宮別て御帰依あらせられければ、源氏の法門の義に候と祝し奉りしかは、殊にめでよろこばせ給ひ、いよいよ信心を増進なし給へりとぞ。

(24) 注(6) 参照。

(25) 弟子定僊撰「画伯月僊上人之碑」（文化七年九月十二日建。『浄土宗全書』第十八所収「略伝集」に収録）。浜口良光『月僊上人 その伝記と作品』（月僊上人顕彰会、一九六九年）。

(26) 勢至堂安置の位牌。

厨子中央「当院常念仏中興大檀那 天樹院殿栄誉源法松山大姉」。

左側「圓盛院殿明普光岳泰崇大姉神儀（池田光政室、勝姫・綱政母）。右側「靖巖院殿從三位英誉松岳意清大姉（一条教輔室、関白兼輝の母）」。

(27) 元禄十一年『日鑑』二月。

二日 晴天、

一、大政所様より白銀三十枚。来ル六日天樹院殿三十三回忌の法事料遣わされ候。

五日 雨天

一、天樹院殿三十三回忌速夜、初夜法事申ノ刻。礼讃行道念仏開闢。

六日 雨天

一、伽陀・観経説誦・廻向、飯齋、四奉請・四誓偈。巳ノ上刻、大政

所様御成り。以後、施餓鬼讀・四奉請・弥陀經、行導念仏廻向。正覺寺・正法院・六役、寺中・大衆一山并に方丈内より七人。法事過ぎ御齋。一汁三菜。但し、施餓鬼ハ齋過ぎ也。

一、大政所様、小方丈え御通り。御雜煮・吸物・酒核出ル。勢至堂御茶屋にて蕎麦献上、杉重并に島台品々馳走。晚七ツ過ぎ還御遊され候。

(28) 正徳二年『日鑑』九月廿三日。

一、一条大政所様御成り。小方丈へ御入り。大師（法然）骨仏并に神反（変）不思議の舍利、御拝なされ度由申し来り、拝みなされ候。大僧正（応普円理）御対面、十念御請けなされ候。大僧正へ紗綾式巻・伊部焼花生・獅子香炉遣わさる。大方丈本尊へ金百疋、天樹院殿（千姫）・円盛院殿（勝姫）御位牌前、御香典として金貳百疋ツ、遣わさる。その後、勢至堂并に御廟参り。大師御廟へも御参詣。一心院へ御成り。常住の舍利御拝覧、方丈より杉折、御近習中迄遣はさる。大サ沓尺沓寸、下重嵯峨野饅頭、二重メ（目）羊羹・唐餅上ノ重煮付け色々、役者四人へ金貳百疋ツ、下さる。

(29) 『洛東華頂義山和尚行業記并要解』（『浄土宗全書』第十八）。

(30) 享保二年『日鑑』六月

一日

一、勢至堂ニこれ有り候天樹院殿・圓盛院殿・靖巖院殿、三本の位牌。今度、大政所御所より厨子沓ツ三本入、新造出来候事。

一、右保徳院より届これ有り。且又、靖巖院殿御菩提のため、今日方丈へ御使者にて、四十八夜料金拾両参り候て、見道（勢至堂看坊）へ渡り候。来ル七日より別時修行の由、見道届け。於方丈「」中直に申渡しこれ有る由、その意得難く候。

八日

一、勢至堂にて、靖巖院殿四十八夜別時開闢。御丈室御出。浄福寺・靈雲院登山。右ハ金十両参候由。見道支配。

廿五日

一、勢至堂へ、政所様内衆より幡式流上り、供養。方丈仲ケ間出ル。

(31) 『大本山増上寺史 本文編』第二篇六「徳川幕府と増上寺」（注22）。

(32) 塩竈義一「円光大師贈号次第」（水野恭一郎先生頌寿記念会編『日本宗教社会史論叢』、国書刊行会、一九八二年）。伊藤真昭「法然上人遠忌と大師号勅許について」（『法然上人研究』第七号、二〇一四年）。

(33) 延享三年『日鑑』四月廿五日

一、八十宮御方、晚七つ過頃、御拝礼なされ度思召し候旨、小林大寺、使者を以て案内これ有り。仍て武家方玄関より御入り。尊牌前、有章院殿（徳川家継）御戸開け、蠟燭・香火を設け、月番御案内。御拝礼なされ候て小方丈え入りなされ候様申上げ候処、集會堂西寄にて暫時御休息遊さるべく由二付、毛氈二・三枚敷設け、御茶・たはこ盆・干菓子出す。御慰ニ御酒なりとも差上げ申すべき哉と窺い候処、然るべきと、大学申され候に付き、宮様并に御老女えハ白三方、次ニ御局兩人え、塗り木具にて、吸物・核二種、取核にて御酒差上げ、暫く御座なされ暮方ニ還御。

(34) 宝暦八年『日鑑』九月十一月参照。

(35) 朝日新聞、二〇一五年一〇月一日朝刊。拙著『本地垂迹信仰と念仏』第六章「村落寺院の諸相」（法蔵館、一九九九年）参照。

(36) 鎌倉仏教の成立と展開は、儒教社会と仏教儀礼の視点から再検討すべきである。拙稿「念仏・法華經」の信仰と「孝經」―鎌倉仏教研究の課題と検討―（池見澄隆編『冥顕論―日本人の精神史―』（法蔵館、二〇一二年）、湯浅邦弘『論語』第二部四「楽と孝の教え」（中央公論新社、二〇一二年）参照。

（いまほり たいつ 歴史学科）

二〇一六年十一月十五日受理